

“Heart to Heart”

第5巻 第3号 (No.16)

発行日 平成23年3月5日

心から心へ わかちあう あたたかさ

瑞々しい感性の存在

武蔵野東教育センター所長 長内博雄

目次	
瑞々しい感性の存在	1
コラム： テレビマンの育児日記	2
療育プログラムのような	2/3
韓国 チャンピッ学校訪問記 (2)	4
ご案内	4

教育センターに通う子どもたちに、時折不思議な面白い感性を感じることがあります。感受性や感覚の分野は、最新科学でも究明し尽くされているわけではありません。以前、NHKテレビで放映されていましたが、脳の神経細胞同士の情報伝達を担うシナプスの量は、一生の中で生後8ヶ月～1歳前後が最も多く、成人の1.5倍にもなるそうです。また、大人にはない新生児の能力が、一年以内に消失してしまう事実など、こうした脳のしくみは人間の奥深さを感じさせるものです。

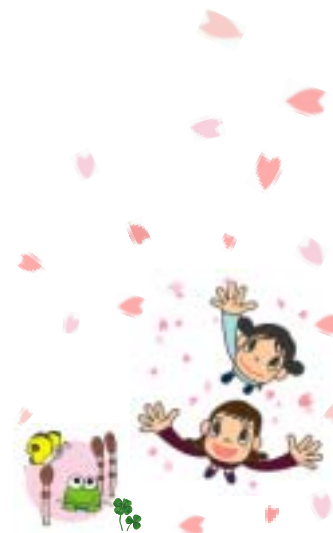
ある感覚器官が障害により働かない場合、他器官の機能が発達することはよく知られています。感覚の三重苦を背負ったヘレン・ケラーは、その自叙伝の中で、彼女の全身が働いて周囲の状況を察知していることを人々はわかっていない、と伝えています。また、他人と握手をしたときには、その触覚の働きで、心が温かい冷たいなど相手の心のあり方が伝わり、その人がどんな声をしているかまでわかる、ということです。刮目に値する内容ですが、この感覚の世界、感性の世界は、私たちの狭い社会規範の世界、目に見え耳に聞こえる物質的な世界の常識を飛び越えており、限りないほどの広がりや深さがあることを示唆しています。

自閉症スペクトラムの子どもなど、発達障害の状態にあって、ことばが不自由で思ったことを言い表せない子どもなども、障害に伴う感覚過敏を別にして、ある種の感受性が高まっている可能性は否定できません。社会性やコミュニケーション力の弱さは、不安恐怖から生じる神経敏感をさらに増幅させるでしよ

う。実際、彼らは他人に対して繊細で臆病なところをもっていることが観察されます。不安の強さから身を守ろうとする防衛本能が自然に働いて、新しい環境に入る時にはパニックを起こしたり泣いて不安を表したり、また人に対してもさまざまに試す行動が見られたりします。これも、その場や人を受け入れるまでの、彼らなりの実験・検証を通したプロセスと言えましょう。

この子どもたちは、一筋縄ではいかない社会性などの習得に苦労していますが、一方、人間同士のコミュニケーションが不得手であるのと裏腹に、ある種の感覚の分野において、実に生き生きとした世界を有しているような気がします。彼らの心の中に、何者にも引け目を感じることのない、存在していることの充実感を伴った、瑞々しい感性が広がっていることを信じていたい気持ちになります。

経済的な生産性のみで人間の価値基準を置く世界では、彼らの存在、人間性は測り尽くせません。今、変革の大きなうねりを感じさせている競争社会のシステムが、劇的に転換し、それと相俟って人々の精神性も高まってきたときには、この子どもたちの、純真にして他を貶める意識など持たない人間性の評価は、ひっくり返るほどに高まるに違いありません。彼らの中の飾り気のない豊かな感性と、不器用なまでに純朴な人柄が、世の誰からも温かく迎えられる時代が到来することを、私は心待ちにしています。そして彼らに息づく感性が、さらに現実の世界と融合する日を夢みて、今後とも精一杯の関わりを続けていきたいと思ひます。





コラム テレビマンの育児日記(3)

「どうせ死ぬのにどうして生きてるの?」

室山 哲也 (学園アドバイザーボード、NHK解説委員)

子供を育てていると教えられることが多い。ずいぶん前、まだ3人の子供が幼かった頃、我が家のペットのウサギ(フラフィー・ボナパルト・ムロヤマ)が突然死する事故が起きた。予想外の暑い夏が続き、熱中症で、子供が見ている前で息を引き取った。世話係の長男は大変なショックを受け、自分を責め、何日か話をしなくなった。数日後、少し元気になった彼が、思いつめた顔で、私に質問してきた。「生き物はみんな死ぬのか?」私はその質問に少し驚いたが次のように答えた。「生き物はみんな死ぬ(正確には死のプログラムは有性生殖の引き換えだという説がある)。人間も全員死ぬ。キリスト様も、お釈迦様も死んだ。死亡率は100%だ。」「パパやママも、自分も死ぬのか?」(息子)「みんな死ぬ。生まれる前にいたところに戻るので、余り心配しなくてもいい」(私)。長男は少し考え込み、さらに質問してきた「どうせ死ぬのにどうして生きてるの?」。

私はこの質問に絶句し、しばらく言葉が出なかったが、親の活券もあり、次のように答えた。「大輔(長男)はお小遣いをもらっているね。どうせ使うのだから、もういらないよね?」あわてて長男は否定し、お小遣いは必要だと主張した。…私は何とか苦境を切り抜け、長男の追及を逃れたが、実を言うと苦し紛れの回答だった。この質問は、すごい質問だ。そうだよなあ。何でだろうなあ。生きるってどういうことなのかなあ。そのあと少し考えてみたが、巨大で本質的すぎてとても分からない。正直言って、いまだに分からない。もう一度聞かれたらなんと答えればいいのか。

私はNHK教育テレビで「科学大好き土よう塾」という、子供向けの科学番組を5年間やったが、子供の質問に窮したことは何度もある。「空はなぜ青い?」から始まって「地上には何故たくさん生き物がいるのか?」「宇宙の果

てはどうなっているのか?」など、私たちが子供の頃感じたのと同じ質問に出会う。しかし私たち大人は、そのような素朴な疑問や驚きをいつしか忘れ、「分かった」ふりをして、その場をごまかし続けることが多い。青空や星空を見上げて感動したり、海の波の向こうに思いをめぐらす時間は、日常的にほとんどない。

私がNHKに入局したとき、報道番組の神様と呼ばれるプロデューサーに、番組づくりの秘訣を質問したことがある。答えは「高度な平凡性」というものだった。ジャーナリストの大敵は「分かったふり」。子供のような素朴な質問ほど、鋭く本質をえぐることを教えたかったのだろう。

子供から学ぶことは多い。私たちはどこまで「あの心」を思い出せるだろうか。心の曇りをもっと取り払わなければならない。



療育プログラムのようす

ダンス教室 一年間の総まとめの発表会では、お気に入りのセーラーカラーの衣装をつけて、元気に踊りを披露できました。胸にたなびく青いリボンと、リズムカルに動くポンポンとが楽しく爽やかなイメージを作り出し、観客からの大きな拍手に達成感を得ることができました。つま先まで神経を集中させて表現することなど、4月から積み重ねてきた「基本」の成果が随所に見られ、個々の成長がはっきりと感じられるまとめの発表会となりました。(新堂)

体育教室 全学年とも、今年度最後の課題である跳び箱に取り組んでいます。幼児クラスは、両足踏み切りで跳び箱の上に乗ること、小学生は、助走の勢いを生かしての開脚跳びを目標にしました。一年間、ミニトランポリンの活動を続けてきた成果もあり、力強い踏み切りや、両足踏み切りの飲み込みが早く、多くの子どもたちが跳び箱の運動を楽しめるまでになりました。来年度も一人でも多くの子どもたちが、体を動かすことに興味を持ってもらえるように支援していききたいと思います。(鈴木)

音楽教室 音楽に合わせて同じテンポで歩くことや、友だちと違うパートを覚えて合奏するなど、高度なスキルが身につく1年を通して頑張った成果が見られるようになりました。子ども達それぞれに好きな活動や歌、楽器ができ、「今日は やる?」「先生、 が歌いたいです。」とリクエストする声が聞こえてきます。また、発表の機会を設けたことで人前での演奏に自信ができました。(後藤)

コンピュータ教室 タイピング練習を続けてきた結果、『ワード』を使って長文の文章入力ができるようになりました。また、フォントの色・太字・下線・書体・文字ポイント・センタリングの操作や「ワードアート」「クリップアート」の操作方法を覚え、年間のまとめとして壁新聞を全員で協力して完成させることができました。また、毎回行っている「レクリエーション決め」の話し合いを通して、自分の意見を言うだけでなく友だちの意見を聞き入れ、尊重する気持ちが育ちました。(藤本)



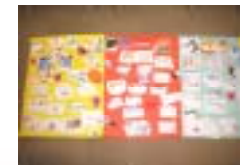
ダンス ミニ発表会



体育 5・6年生の跳躍



音楽 テンポに合わせて



コンピュータ グループごとの新聞



幼児 少し不安な顔をして教室に入ってきた4月から、あっという間に1年が過ぎようとしています。この時期感じるのは、積み重ねの大切さです。毎回繰り返し練習してきたことが、それぞれの子もたちの中で、力となって表れてきます。それは製作活動だけではなく、着替えなどの生活面、お友達との係わりを含めた社会性、体を動かすこと、歌を歌う時など様々です。取り組んでいる時の真剣な目、やり終えた時の満足そうな笑顔は、見ていて嬉しくなります。この気持ちを大切に、これからも、いろいろなことにチャレンジしていきましょう！応援しています。(本田)



幼児 おひなさまをつくりました

1年生 4月から2年生になることを楽しみにしている子どもたち。この1年間を通じて、自信を持って取り組めることがたくさん増えました。国語では、ひらがな、カタカナの読み書きや音読、黒板書写を中心に文字に慣れ、「いつ」「どこ」「だれ」など文章の読み取りにもチャレンジしました。算数では、数字の読み書きや計算だけでなく、おはじきや時計、お金など具体物を実際に操作しながら理解を深めました。(高橋)



1年 ボール運動

2年生 休日や学校での出来事などを友だちに発表する練習をしてきました。「いつ・どこ・だれ」のポイントを意識して、上手に発表できるようになりました。国語の時間には、発表で練習したことを活かして文章を書く学習をしています。算数のお金の学習も、筆算や掛け算など、これまでに学んだことを使った問題に挑戦しています。1年間で学んだことを、すっかり自分のものになっている姿を見て、とても頼もしく感じました。3年生になってからの更なる成長が楽しみです。(新田)



2年 文づくり

3年生 春の訪れを感じるこの季節に合わせて、詩「どこかで春が」の音読をしてから学習を始めています。国語では、物品の形状や用途、人物の服装や職業などに着目して、それを文に綴る練習をしています。算数では、実際に展開図を箱に組み立てて、平面と立体のつながりを学びました。子どもたちは「サイコロの完成！」と喜び、こわれないように慎重に扱っていました。また、真剣な表情で作業をする姿に成長を感じました。もうすぐ4年生ですね。気持ちを新たに、また一歩ずつ進んでいきましょう。(北川)



3年 箱のできあがり！



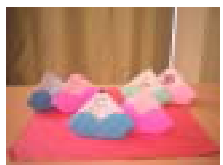
4年 大縄跳び

4年生 学習の他に年間を通して、本やカードゲーム、ボール、縄跳びなどを使って、交友を深めてきました。二人組のキャッチボールでは、相手のことを意識して取りやすいボールを投げたり、自分の好きな本を友だちに紹介したり、また大縄飛びを複数の友だちと跳んだり、カードを使って簡単なゲームを子どもたちだけで行ったりと、本当に笑顔で楽しそうに過ごしていました。これからも、人と上手に関わり合いながら大きく成長して行ってほしいと思います。(宮下)



5・6年 1年間を振り返って

5・6年生・中学生 物語文「だいじょうぶ、だいじょうぶ」を全員で音読することから始まった今年度のプログラムも、あっという間に1年間が過ぎようとしています。学習面だけでなく友だちとの関わりを深めることで、集団の中での約束事を守ることができるようになり、言語能力も向上してきました。プログラム最終回には「1年間を振り返って」と題して、活動の様子をまとめた文章を保護者の前で立派に音読することができました。(藤本)



言語 折り紙のおひなさま

言語プログラム 今年度も色々な勉強をしました。幼児は、歌や手遊び歌を通じて歌えるところが増え、歌に合わせて動作をすることができるようになりました。小学生は、折り紙での製作を通じて「裏返してまた三角に折ります」などの動作を通じてことばを覚える練習をしました。完成した作品の展示を見て「これ見た人、いいなーって言ってなかった？」などと誇らしげに言っていました。実生活に結びつくような練習をこれからも重ねていきます。(計野)



SST どんな気持ちゲーム

SST教室 最近、気持ちの学習を重点的に行っています。様々な場面の絵を見て、自分だったらどんな気持ちになるか、なぜそういう気持ちになるのかを発表し合う活動では、同じ体験でも人によって感じ方が違うということを知ることができました。また、いろいろな表情のイラストを見て、その人の気持ちを表す言葉を考える活動も行いました。友だちの意見を参考にして、それと似ている気持ちや近い気持ちを思いつくことができ、たくさんの気持ちを表す言葉を知ることができました。(大澤)



韓国 チャンピッ学校訪問記(2)

副所長 計野 浩一郎

チャンピッを訪問して3日目に李校長から日本語を話せる自閉症の方に通訳を頼むことができるの話がありました。半日だけということもあり、その方をお願いすることにしました。その彼のことを今回は紹介したいと思います。



母親と一緒に現れた彼は、20代半ばの年齢だと聞いていましたが、中学生かと思うほど童顔で幼さの残る方でした。緊張もあったと思いますが、律儀で生真面目な挨拶と話し方、唐突に質問するなどの特徴は最後まで変わりませんでした。

彼の日本語は、日本のアニメのせりふを素直に取り入れるという特有の学び方だったようで、外国の方が日本語を話すときの独特のイントネーションはなく日本人と話しているような錯覚を起こすくらいに流暢でした。

母親と、彼の生育暦について話をしていたのですが、彼はしっかり障害受容できていて、自分のことを語る母の言葉を通訳するように促され、何度か聞きなおしてから私に伝えるという時間のかかるやり取りが続きました。

彼は5歳の時に言葉を獲得したそうで、発語は「マンマ」などの語頭に「マ」のつく言葉を3つ言ったそうです。幼児期は多動で危険なこともたくさんあり苦勞し、小学校に入学してからはいじめに遭い心痛が絶えなかったとのことでした。育てるときに心がけていたことは、彼がやりたいということではできるだけかなえるようにしたこと、約束したことを3回言って実行しない時は厳しくしたとのことでした。彼曰く「母は厳しく怖いですが、尊敬しています」とのことでした。

その後については、自分で話すように母親に促され、通訳から解放されこともあり、進んで自己開示してくれました。その途中で何度も「僕の話はつまらないですか？」

「僕だけが話すのはだめですよ？」と聞かれた時に、それだけ人間関係につまずいてきたことを感じ、少し心が痛くなりました。

彼は、小学3年生の時にいじめに遭っている自分に気づき、体が大きく腕力の強い人になりたいと願っていたこと、中学1年生の時に学校に行かない宣言をして不登校になったこと、母親に学校に行かないのなら仕事をするように言われ、ポスター貼りの仕事をインターネットで見つけ面接に行って仕事を始めたが、その社長が給料を払わないなどトラブルが多々あったこと、これなら学校に行っているほうが良いと思い中学2年から再び学校に行くようになったが、いじめは卒業するまで続いたことなどを語ってくれました。

その後、彼はアニメーションの勉強ができるころに進みたかったらしいのですが、母親の勤めで普通科の高校生になります。高校ではいじめはなかったけれど、やりたいこともできず、友達もできずさびしくつらい日々だったとのことでした。その経験から「進学は、本人がやりたいことがやれる学校選びが大切です。」と話していたことが印象に残っています。その後、障害者を積極的に受け入れている大学に進んだ後、今は3Dを製作する技術を身につける専門学校で学んでいるということでした。その学校から3ヶ月間インターンシップで来日し、3D製作会社で仕事するという経験もしたそうです。休みの日は秋葉原に通いオタク文化を満喫し、ますます日本が好きになったそうです。彼曰く「韓国はまだ日本のオタク文化に遠く及びません！」

彼の話は、私にとっては貴重な経験でした。他にもお伝えしたいことがたくさんありますが、またの機会にお伝えできたらと思っています。

セミナーのご案内

平成23年度のセミナーの日程をご案内いたします。

- ・平成23年 6月3日(金) 10時~12時
「ことばの学習と心のやりとり(2)」(仮題)
三好 純太(葛西ことばのテーブル)
- ・平成23年 9月9日(金) 10時~12時
「視知覚機能問題への支援 Part2」(仮題)
築田 明教(かわばた眼科 視覚発達支援センター)
- ・平成24年1月31日(金) 10時~12時
現在調整中

平成23年度療育プログラムについて

まだ若干空きのあるプログラムもございます。
空き状況につきましては直接お問い合わせください。

武蔵野東教育センター

〒180-0012 武蔵野市緑町2-1-10

電話 0422-53-8585 FAX 0422-53-8595

Email: education-center@musashino-higashi.org



ホームページもご覧ください

<http://www.musashino-higashi.org>

心理検査のご案内

WISC-、K-ABC、新版K式の検査を実施いたします。ご希望の方はお電話でお申し込みください。

時間: 60分程度(火または金曜日 午前中)

費用: 15,000円(教育センター会員 14,000円)